

官くわんの許もとへ往ゆて看みふ彼かの兩頭りやうとうの蛇へび前まへ裁さいの松樹しょうじゆの下したに圓ま蟠ばんて居ゐり
 ろろ八兵衛はちべゑと手てに小鐵せうてつと持もて忍しの足あしふきくまらり彼蛇かのへびとまらり
 うふ打うちらるるへ蛇へびと大おほい小腎せうじんと鐵頭てつとうとりりげて八兵衛はちべゑが方かたへ
 越こえ来る八兵衛はちべゑ再また般ばん鐵てつとあげて連打つれうちふらち居ゐるまは此こゝへ
 く瘻あし々々とある處ところと扯ひきくく皮かわとを死か菜さい刀たみで三五寸さんごすん程ほどづ
 小斬醬油せうせんじやうゆとつけく残のこび喰くひ二固ふたこの頭うらと皮かわと骨ほねと火ひ火ひく
 く焼や炭すすのこくく残のこりて食くへく塵ちりりり物ものも残のこり
 處ところあつて莊官しやうくわん大おほい小僕せうぼく死しする間まを要い用ようふあつては是こゝへ
 八兵衛はちべゑ不あ與らへくとも小僕せうぼく死しする間まを要い用ようふあつては是こゝへ
 と受うけ越こえて山田屋やまぢやへ歸かへり是こゝを看み閱くわん衆しゆ人ひと大おほいふおどし

百家三十三

き八兵衛はちべゑ蛇へびの毒どくふあつて遠とほく死しべつて日毎ひごとり
 噂うわさ〜ろろが八兵衛はちべゑ何なにの仔こ細こもあつて其後そのち中ちゆうに二十餘年よじゅうねんが間ま
 一日いちにちの病まもあつて天明てんめい八申年はちしんねん八十餘歳やじゅうさいまで死しび兩家りやうけより美み
 美み〜〜葬送むさうじやうと執行しやうぎやうらり竟つひ小蛇せうへびの身みとあつて

281
3

百家琦行傳三之卷



百家琦行傳

四

281
4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

百家琦行傳四之卷目錄

○河内屋太郎兵衛

○田中丘隅右衛門

○川村瑞軒

○森島中良

○朱樂管江

○狂哥坊主

○市川柏庭

54367
28.3.31
寄贈

○窓竹村竹

○幸馬竹

百家琦行傳四之卷

○河内屋太郎兵衛

八島五岳輯

大坂備後町堺筋小河内屋太郎兵衛といふ者ありたり世人
畧して河太郎と呼ぬ商家やと家ありつゝも富り安永より
寛政の頃まで浪華に名高き滑稽家あり常小人と談話する
ふ其ゆりゆき事譬々々浪華の風俗より彼岸乃茶
の子といふ物と家毎ふらる事あり是れ彼岸會のさうり
あつてふを作物と專として蘿蔔四五根豆腐一ちやう或
胡蘿蔔牛房のちやう其外何ふも價十四五錢なるもの

廿四五銭が程のゆれとらなる事家毎大やう相おかり河太郎
 思ふやう彼岸の茶の子何れも同じ物とやつらう貫あり不
 益め更あり何と跡ふのころと要ふゆゆのものを配んと思ひ或
 彼岸ふ竹と考く買入おれ物于竿と一本づ配アたらう衆人たら
 一紙茶け子ありとて笑ひしか後々永く要ふ立て何日やても
 河太郎が名といひ續くやや亦ある秋の彼岸八月十五日中日
 ふ當りたらうとれ河太郎まて工風とせらうとて五六寸ありゆめ
 小く荒と考く求り裡ふ雀と一羽づゆゆと上と白紙ゆゆとら
 つち蓋とて夫ふ彼岸の志河太郎と書着てらるうたらう貫る
 家ふハ不審ふかりゆ彼岸東國ふくの中う何うとらうとて言

のける故ふ紙と世とあり看む忽ち裡より雀一羽といひ出く
 客次中とらび廻り竟ふハ外面へ舞ひて那里ともかく去行
 たら是彼岸八月十五日ふ中うゆゆ放生會の意あり然
 して跡ふ荒ひたら残て永く庵福ふ調室とてとらう河太郎
 が更と云いでたら或る河太郎さる方さんせいの集會の席とて島の
 舟の声妓とも四五人河太郎とらうゆゆ何とて住吉へ倡引
 多人と迫りたら河太郎點頭とら何の日倡引ゆべと
 約束して別またら斯て當日ふありたら河太郎一般の樓
 船ふ酒さうかゆり入させ彼き妓とも四五人のとら呼と乗
 せ船中うゆゆ嘯啣とて死出たらうが頓と住の江の岸に著たら

崖の上野伏の非人ども四五人執とらふて臥居り河太郎
 酒ふ酔ふ這非人どもと呼かけ你輩爰ふ末
 て我酒の相とせよと云ふも非人ども初め初めと辞退し
 居り河太郎河太郎只管よびくるも竟て非人ども怕る
 這来り船ふのりあつて怕あがり御酒頂戴はつはつ
 人と五人とも船ふ入る何れも髪を乱し鬚をひらち太甚
 破らるる羸服とほひ繩とりの帯とあり或は顔
 腫物でれ膏藥とせり亦足ふ大疵ありて血塗らる
 と古布の八重十文字ふひき蒐り片足ひきあがり来るも
 あり其汚き支り許か色妓ども穢らうていひはる



と止むも河太郎一向不関つて頃で鍾子とありて
とのこ這非人們ふくけは非人們とやいふは
と喫ハ河太郎まゝ酒菜と扱きて與へりし非人等懼びて
是とろくも奇妓どもも大に怖れ残り陸へ逃げ登りて
個も船にありて河太郎と非人と相手し只管さうさうと廻
らゝるが追々酔まりて頓に非人們三弦とりて弾く
りりりが野伏とゆひの外その音色清らふ妙手あり夏に
べ〜び亦外の非人ら其の唄と諷々其の最も廉しく譬
るよ物あり一河太郎が持し扇とかりて舞をあり其
舞の手はく奇妙あり五人とも千般の藝と冬〜るふも陸

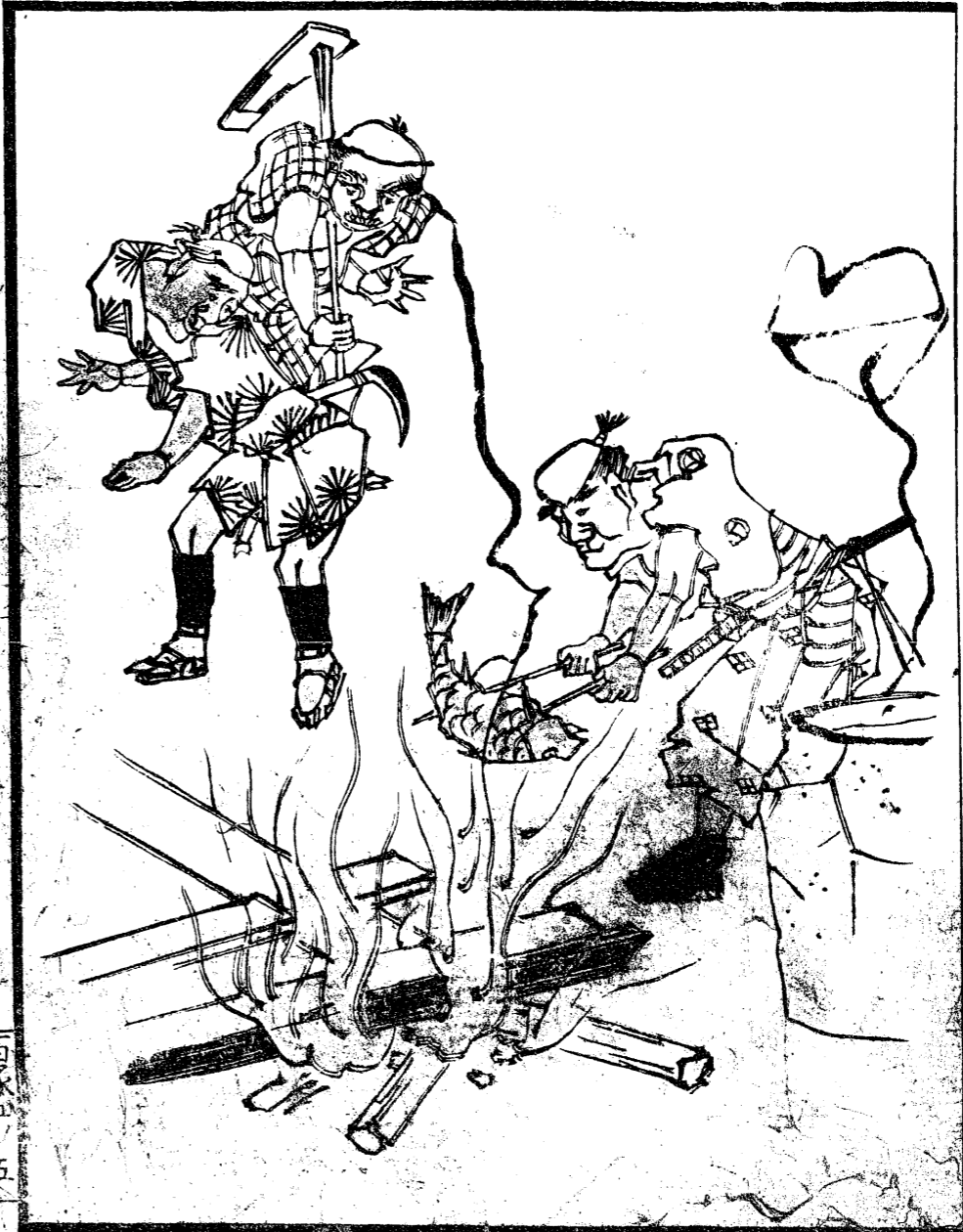
一逃ぐる奇妓とてめ外々の船より渠們が藝のありて
と讃る人らとありて河太郎大いに喜び宿も休ら
勤〜り〜るが褒美と〜るべ〜るを樓の上よりひら
包袱と抱き〜る〜這裡より衣服五つと持ちて非人們と與へ
る非人們喜び急ふ川中へ飛び入ると沐浴し膏藥とさじ
足の布を脱ぎとて裸む手足は疔やく顔は腫物ありて
も一個の好男子やうと舳とねる衣服と着るも五人も對
の衣装あり這中一人髪よく結りのありて個々髪とさう髪
ゆい正〜る〜び酒の〜唄〜ひ三弦ひきて懐きさうさう
輩も今と〜る〜るが頓に船へ入りて諸侯ふ〜る〜る

是ら河太郎豫て京より幫間と呼よせられ何吳と名めし合せ書
放ともと唄き斯る戯をも做つるも有る是より入るも打
列てそれをもく泰詰しよりより都て河太郎が物かより
とほぐあつて能人の知とらうあまふ畧れ

○田中五隅右衛門

五隅よりんら原東海道川寄宿の問屋場の人足ありし其
器量衆ふ秀よりりもて問屋役人となりしを竟止事あり
御方の御より立ふらひて大祿の武官とあまりたりしめ川
寄宿よりりし頃近郷ふ妻の母のありりるが五隅よりん一時
あの大母のよりり時候の見よひふ行んと思ひ何うか土産ありて

行べしとて近隣より網とあつて川瀬とあつてるふ鱈
りる魚一尾より得たりしをいふ是と人事ふとてしや頭
携へて大母のよりり急せりるが只有山裡より狩人の網と
置し其中ふ雉子一羽かゝつてはけりしと羽とせし
て在り時節獵師もあつたり不見は五隅よりん是と看
着あつたり人の人事よせんら這鳥こそ好まらるし
忽ち彼雉子と棄ひたり持来し鱈と網の裡へらとて
此這處とせ去り其迹への網とけりる獵師き
件の鱈と看と大りふゆりり是りふ水中に住
の山中の網ふかゝりし心得とて頭て同輩のしは



末ア〜〜看せり〜〜い〜〜も驚き是凡事小あ〜〜
 頓て陰陽師トト〜〜り小是ひ〜〜人山神の祟あり快〜
 此の魚と神小祭るべ〜〜と示〜〜程小無智の愚民もこれ
 小返し俄小村中銭と集めてもらまら一箇の祠〜〜華表
 瑞籬まで造立かの鱧と大明神と勧請〜〜其后一日大いふ
 風雨ありて乾坤震動〜〜り々る村民〜〜と神変とあり
 乃得次の日鱧大明神へ湯釜と〜〜け神樂と奏〜〜巫祝素
 主ら〜〜ふ窺罫何が不思議とあり〜〜金〜〜け〜
 思ひ山神の祟の〜〜鎮らぬ猶も不日ふ山〜〜海あり〜
 わ〜〜一圓の泥海とあり郷人お〜〜死〜〜託宣あり〜

ふと村裡の愚民大いふやうに再般ゆりけ銭と集り巫祝事
とものにて神鎮の神事と執行ふべしと聞あひうる五濁
ゆん是と聞て暗ふと一々目彼村ふりりおのま川
宿の田中五隅ふんといふ者あり鱧大明神の崇そむる
鎮まわらばべし假令の事と做ともあはれ驚きさふへ
うらばと云おれて頓て彼祠と打やうり鱧と瓶の中より社
燈明の火を以てあそむ華表と薪とかの鱧と炙物
のうらあそ食ふ神酒ふ備し酒うちのみ共俵我家へ
アうり是と看村民ども大いふ駭き山神の崇そむる大いふ未
べしとて只管嘆ぎあふんご其后何のうらやもあし後

五隅ふん御といふ成し御役みく這處へ来り這
事とて説話まゝとあり
輯者曰く此物うら或戯作者別人の事とて作
その語書ふおれのせう看人是とも虚説ありんを
疑ふべし然とも中華の書あり同説あり風俗通ふ曰
く汝南の銅陽とる處の田中あり磨と拾い得る
者あり其磨と次の中へおれ外へ行り其跡あり
魚商人這磨と見て喜び持去んとして其不慮ふ此磨と
得る事とゆい其換物ふ一尾の鮫魚とこの處
ゆれて去り少時あつて嚮ふ磨とゆらる者来り